

「薄明光線（はくめいこうせん）」というのは、太陽高度が低い明け方や夕方に、雲の隙間から地平線または上空に向かって、太陽光線が放射状に見える「大気光学現象」の一つです。「薄明光線」が大気光学現象としての正式名なのですが、ほかにもさまざまな呼び名があり、日本では古来から「吉兆」とされていました。

「ヤコブのはしご」「天使のはしご」；旧約聖書に登場する記述に由来する。

「レンブラント光線」；画家のレンブラントが好んで題材とした。

「光のパイプオルガン」；宮沢賢治がこのように表現した。

この日東京ドームで出会った薄明光線は、雲から上空に向かって放射状に広がって見えるものでした。この放射状の光線は、条件が良いと天頂（頭上）を通過し、観測者の背中側、つまり太陽とは反対側の方角（対日点）に「収束」するように見えることがあります。この収束（正確には収斂／しゅうれん）するように見える光線は「反薄明光線」と呼ばれています。反薄明光線は稀なばかりでなく、見えていてもなかなか気づきにくい現象です。東京都内のような建物が多き場所では観望は難しく、360度視界が開けたような場所で見られます。

（2024年10月中旬／文京区東京ドーム）

